



JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Monday 22 May 2006 (morning)
Lundi 22 mai 2006 (matin)
Lunes 22 de mayo de 2006 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらかを選んでコメントリー (解説文) を書きなさい。

1 (a)

容易に涙を流さなくなったのはいつのころからだろうか。

姉が父にしかられているのを見てもらい泣きするめめしい男の子だった私は、いつから泣かなくなったのだろう。

5 中学三年の夏休み、都大会の優勝候補になっていたサッカー部を中途退部するとき、「おまえは仲間を見捨てて平気なのか」と涙ながらに詰め寄るコーチを前にして、私は泣かなかった。

10 一年の浪人生活を終えた春、国立二期校に落ちて家にいると、合格した高校時代の仲間たちから、「新宿で飲もうぜ」と電話が来た。私は泣かずに二期校の受験勉強をし、北帰行を口ずさみながら都落ちしていった。

15 大学受験で苦戦を強いられた理由は、文科系の頭しかないのに理科系の医学部を志望したからだだった。なぜそんな無謀なことをしたのかといえば、知的でうるんだ目をした女の子から、「あなたは顔が老けているから医者にもむいてるわ」と言われたからである。医者になってから付け足した医学志望の理由は山ほどあるが、細かいフルイにかけて最後に残るのはこの事実だけである。

20 若くて知的な女の目の輝きには、男の人生を憂える力が宿っている。私は身をもって、この古くから言い伝えられている人生の定理を証明してみせたようなものだった。

学生時代、彼女に会いに古都の女子大を訪ね、帰りには見送られることもなく北国行の急行列車に乗ってからも、私は泣かなかった。

25 要するに、自分一人が悲しければいいのだ、とわかったとき、私は泣かないのだ。年を重ねるにつれ、多くの人たちとかかわって仕事をするようになってみると、自分だけが責任をとればそれですむことほど容易なことはない、と確信してきた。

医者になってから、思わず泣いてしまったことが二度だけある。

30 肺癌の末期のおじいさんがいて、おばあさんが付き添っていた。息子たちはみな東京に出ており、おじいさんが亡くなれば、おばあさんは長男に引き取られて東京に行くことになっていた。生まれ、育ち、嫁いで子供たちを成人させたこの町を離れるのは、おばあさんにとってはなによりつらいことだった。おじいさんさえ生きていてくれれば町を離れなくてすむ。おばあさんは必死に看病した。

初秋の朝、東京から駆けつけた息子たちに看取られて、おじいさんは静かに呼吸を止めた。七階の病室の窓から下を見ると、おじいさんの今日の着がえを家に取りに行っていたおばあさんが、風呂敷包みを背にしよって裏路を走っていた。腰を曲げ、おぼつかない足どりで裏道を急ぐその姿に、それまで涙を見せなかつた息子たちが声をあげて泣き出した。

死は生き残る者たちにとってのみ意味をもつ。私は自然に湧いてくる涙を眼鏡の下に隠

しながら、とても大きな、そして悲しい発見をしたような気がした。

おじいさんの死によつて、おばあさんは住み慣れた町を離れねばならなくなる。それ以

35 上に、二人が夫婦となつてからの長い間に培^{つちか}われた共有の思い出が、語り合い、確認し合
う者を亡くした時点から急に色あせたものになってしまう。それは、おばあさんにとって
この上もなく悲しいことである。息子たちよりもおばあさんの悲しみの方が深いとしたら、
それは共有した思い出の量と質の差なのだ。

40 私はこの日から、末期癌の患者の家族に予後を説明するとき、患者と最も多くの思い出
を共有している人を選ぶようになった。そして、それが必ずしも夫が患者であるときの妻
であつたり、息子が患者であるときの父親であつたりしない場合があることを知った。

早く死んだ母親の代わりに私を育ててくれた祖母が他界したとき、私は泣いた。泣いた
あとで見る故郷の山々が色でくすんだ灰色をしていた。子供のころ見た山肌は明らかに違
う色だったのだが、それを確かめる相手がもういないのだと知つて、また泣いた。

45 ささいな出来事や見慣れた風景を共感し合つた思い出こそ、亡くしてみてもはじめてその
貴重さに気づき、人を泣かせるものなのだ。

(南木佳士『ふいに吹く風』一九九一年)

(注)

南木佳士 (なぎ けいし) (一九五二——) 長野県の医師。作家。

北帰行 戦前から戦後にかけて流行した歌。北へ行く旅人の悲しみが歌われている。

設問

——作者南木は、「泣く」「泣かない」を通して、人間の生と死をどのように見つめていま
すか。

——作者には医師という職業がありますが、医師としての視点は作品のなかでどのような
役割をはたしていますか。

——この文章の特徴とその効果について、考えるところを述べなさい。

1 (b)

草のうた

ゆくりなくもぼくは草原に片足で立った
 そうしなければ草になることができなかつたから
 林の上にはとがった雲の耳が突き出ている
 そいつの疑わしそうな眼つきがぼくにはつらかつた
 5 ぼくはかきがたに曲げた手をさらさら振って
 いっしょうけんめい草のなびくふりをした
 けものたちは何も気づかずにとおつていった
 よろよろそうやつて立っていると草なのだと思つた
 まえの自分もあとの自分も考えられない
 10 ぼくは草なのだと胸いっぱい波をたてた
 風がたえず吹いてぼくの眼をつめたく黒く乾かした
 ぼくの右にもひだりにも 前にも
 ずっとむこうの林のへりまで
 せの高い草やぬるんだ草がぞろぞろ生えていた
 15 そいつらは草なのだった
 ぼくはそいつらに挨拶したいと思つた
 そいつらとへらへら笑つて合図をしたかつた
 そいつらはけれどもちつともぼくを見なかつた
 いや そいつらはぼくのように見えなかつた
 20 てんでに壘を揺すつたりそらをながめたり
 細い眼をあけてひよろひよろ風に笛を吹かせたりしていた
 ほんとはぼくはそいつらではないのだつた
 青いそらを雲がはしつていた
 林はしんとしてもくもく並んでいた
 25 ぼくはしびれた片足の上に立っているぼくで
 ぼくは草ではないのだと思つた
 草でないぼくのなかにぼくは草のうたをきいていた

〔天沢退二郎「道々」一九五七年〕

(注) 天沢退二郎 (一九三六—) 詩人。童話作家。フランス文学者。

ゆくりなくも 思いがけず、偶然に。

設問

- この詩のなかの「ぼく」に対して、どのような印象を持ちましたか。その印象はどこから来ていると思いますか。
 - この詩のリズムや構造、ことばの使い方にはどのような特徴がありますか。
 - 表現や表記にはどのような工夫がされていますか。それらは詩の中でどのような効果を与えていますか。
-